

音楽的能力に及ぼす放送教育の効果について

石川 桂 司*

(昭和51年7月10日受理)

はじめに

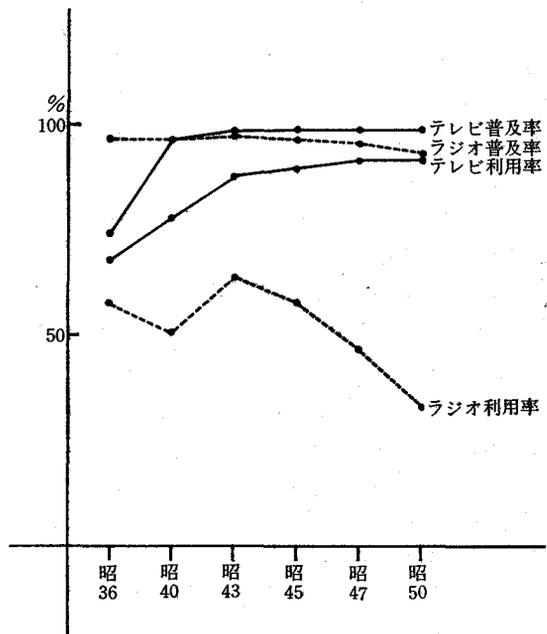
昭和28年に始まったテレビ放送は、その普及率の急激な上昇とともに、一方においてマス・コミ状況を大きく変え、他方においては、学校教育における視聴覚教育の在り方を大きく変えてしまった。

すなわち、昭和30年まで1%にも及ばなかったテレビ普及率は、昭和30年代後半から急激に上昇し、昭和40年代に入って2,000万台の契約数に達した。そして、昭和50年3月には91.7%の普及率を示している〔6〕。

このようなテレビの普及は、映画産業を斜陽化させ、ラジオの放送内容を一変し、さらに週刊誌をはじめ出版界にも大きな影響を与えている。こうしたマス・コミ界の変化は、単に、われわれの生活におけるマス・コミとの関係に影響を与えたのみでなく、日本人全体の生活構造それ自体を大きく変えてしまった。

一方、学校におけるテレビの普及率・利用率も、昭和30年代後半から40年代にかけて急激に上昇した(第1図参照)〔3〕。その結果、16ミリ映画・スライドを中心として展開された昭和20年代から30年代にかけての視聴覚教育実践は、——とくに小学校・幼稚園の場合——テレビを中心とした実践に変化してきている。今日の小学校では、その90%近い学校で毎週テレビが利用され、とくに理科・社会科・道徳などの授業に、系統性・継続性・簡便性をもった映像教材〔4〕として取り入れられている。

第1図 小学校におけるテレビの普及率・利用率



昭和20年代に16ミリ映画・スライドを中心にした視聴覚教材を取り入れて実践・研究をすすめていた学校は、この面に特別の興味と熱意をもった教師のいる学校であり、その段階にあつては、ひとつの「教育運動」としての域を出ない視聴覚教育であった。けれども、テレビ学校放送が量的質的に充実してくるにともない、テレビを中心にした視聴覚教材を取り入れた授業が日常化していった。そして今日では、視聴覚教育や放送教育の研究会と特別に銘打たない通常の教科教育研究会でも、テレビ利用の問題が討議されるまでになり、日常的な「教育方法」として定着しつつある段階に達したと言える。

学校の内外におけるこのようなテレビの普及は、子どもらの人間形成に、影響を大きく、しかも複雑に与えている。

本稿は、このうちとくに、児童の音楽的能力に及ぼす影響について取りあげ、比較・分析しようとしたものである。

I 問 題

1. マス・コミュニケーション、とくにテレビの影響について

1) マス・コミュニケーション効果の概念

マス・コミュニケーション（以下マス・コミと記す）の影響について、南〔18〕は、受け手がマス・コミとの接触によって与えられる生活上の変化として捉え、次のように規定している。

「マス・コミの効果とは、マス・コミの送り内容が、受け手の認知・欲求・感情に、受けとり反応（接触反応・接触後反応・再生反応）をこえて、永続的な変容をもたらすことである。」（括弧内石川）

このような永続的な変容という観点に立てば、新聞・ラジオ・テレビというようにマス・メディアが発展していくプロセスの中で、マス・コミは、人々の生活に多面的な影響を与えてきた。その内容も、プラス・マイナス両面にわたって、複雑に論じられている。とくにテレビの時代になってからは、その普及の速度の急激さとともに、その影響力も著しい。そして、その影響は、人間の生活におけるプラスの影響よりも、「悪影響」「弊害」として論じられることが多い。すなわち、「一億総白痴化」とか青少年非行化の原因として論じられたことは、このことを示している。

けれども、本稿では、人間形成に及ぼすテレビの影響の積極的側面に視点を当て、とくに音楽的能力とのかかわりあいを考察してみようとするものである¹⁾。

2) 今日の生活におけるテレビの位置づけ

ヒンメルワイト〔2〕は、テレビの児童に与える影響について、時間的側面と番組の内容的側面から与えられる影響の2つの点を指摘している。これらの点から、われわれの生活におけるテレビの位置づけについて考察してみる。

昭和50年の国民生活時間調査〔7〕によると、日本人全体の一日平均テレビ視聴時間は、3時間19分である。これを子どもについてみると、テレビの普及率が33.2%であった昭和35年には、10～15歳の子どもの平均視聴時間は、56分のみであった。これが、普及率の88.7%になった昭和48年の調査では、2時間19分に増加している。そして、この時間を生み出すために、睡

1) マス・コミの効果については、その概念規定について、辻の論文〔15〕に詳しく述べられてある。

眠時間が減少し、戸外で遊ぶ「レジャー活動の時間」「家事・仕事」の時間が減少している〔8〕。

このように、テレビの普及は、子どもを含めた日本人全体の生活時間の在り方を、大きく変えてきたと言える。

また、今の子ども達は、出生と同時にテレビのある生活の中に生きており、満1歳頃には、テレビ番組のテーマ音楽やコマーシャルソングにあわせて、からだをゆり動かすようになる。昭和42年の調査〔9〕によれば、1歳台の幼児の71%がおもしろがってテレビを見るようになり、きまった番組を好んで見るようになる。そして、幼児は一般的に言って、マンガや怪獣ものに大きな興味を示す。けれども、これらの番組のストーリーや映像表現のおもしろさに反応するのは、2〜3歳頃からであり、それ以前の1歳前後から、テーマ音楽やコマーシャルソングの、とくにリズムに対して反応しているのである。

このような、乳児の頃からのテレビに対する運動感覚的反応は、当然、諸能力形成の過程に大きな影響を与えるものと考えられる。テレビを通して子ども達に親しまれている曲の中には、おとなにとっても難しい auftakt のリズムが随所に使われているものも多い。そして、幼稚園の子ども達が、このような高度なリズムを、正しく歌いこなしているのに驚かされる。このような能力の伸びは、テレビの無い時代の子どもらには期待できなかったのではあるまいか。

このような問題意識に立って、乳幼児時代からのテレビとのふれ合いが、児童の音楽的能力の形成に大きく関係していると考え、本稿の分析を試みたのである。

2. 学校放送利用の現状と効果について

1) 利用の現状について

学校放送、とくにテレビ番組の利用は、前述のように、昭和30年代後半から40年代にかけて急激に上昇した。その利用状況を、学校種別に示したものが、第1表の通りである〔2〕。

第1表 テレビ利用率の推移

	昭.36.	昭.38.	昭.40.	昭.42.	昭.44.	昭.46.	昭.48.	昭.50.
幼稚園	69.8	76.5	76.5	87.2	88.8	80.7	75.9	81.7
保育所	69.5	79.9	83.7	93.6	95.4	90.7	83.7	92.5
小学校	68.8	77.5	78.4	86.5	89.6	89.7	86.1	92.5
中学校	35.6	25.5	24.5	29.9	33.9	36.9	40.2	41.3
高校(全日制)	8.0	7.2	9.2	19.6	26.4	31.3	45.4	49.8

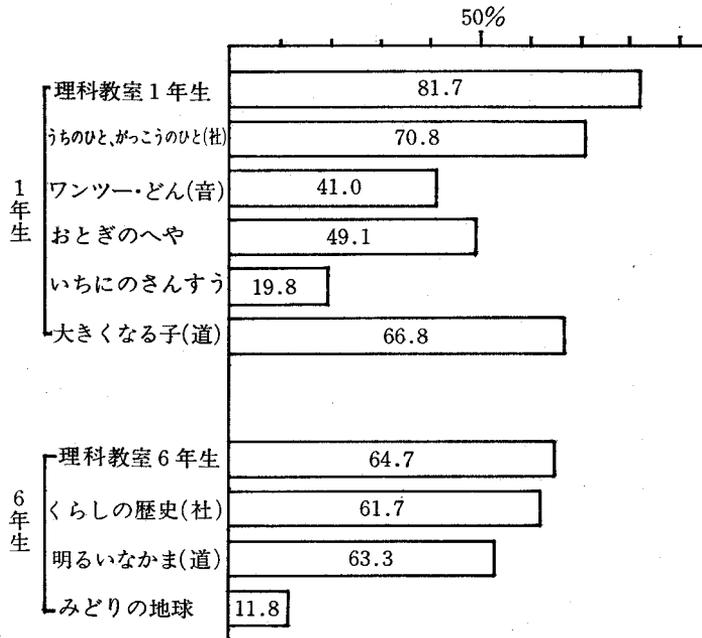
今日の幼稚園・保育所・小学校では、80%から90%以上がテレビを利用しており、中学校・高校の場合は、余り使われていない。中学校・高校では、教科担任制をとっているため、時間に制約される放送教材はなかなか利用されにくい。今でも、テープレコーダーを利用したラジオ番組利用率の方がテレビよりもやや高いけれども、近年、VTRの普及がすすむにつれて、中学校・高校におけるテレビ番組利用も、徐々にすすんできている。

次に、小学校における番組別の利用状況を、昭和50年度の調査〔3〕から考察してみる。小学校1年生と6年生について示したものが、第2図の通りである。

これによると、理科番組の利用が最も多く、続いて社会科・道徳という順序で利用されている。そして、この傾向は、小学校の全学年にわたって共通している。

これに対して、小学校1～3年生のみに放送されているテレビ音楽番組の利用率は、各学年ともかなり低い²⁾。幼稚園では、「人形げき」に続いて、音楽番組「なかよしリズム」の利用率が高く、75%を示しているが、小学校の場合は余り利用されていない。

第2図 テレビ番組別利用率(小学校)



2) 放送番組の利用効果について

テレビ・ラジオを含めた学校放送番組全体の利用効果には、特定の1番組を利用した場合の短期的効果と、年間通して利用した場合の長期的累積効果の2つがある〔10・16〕。そして、放送教材のもつ系統性・継続性・簡便性という特性からみても、放送教育の真の効果は、シリーズ番組の継続利用により長期的累積効果にあると言われている。

この効果についての研究は、ラジオの時代から、多くの研究者によって行なわれ、それらをまとめて考察した論文もある〔1・10〕。

けれども、音楽番組についての調査研究は、余り多くない。その中のひとつにNHK放送文化研究所が、1954年から2年間にわたって、東京三多摩地区で行なった調査研究がある〔17〕。小学校3年生・5年生を対象に行なわれたこの調査によると、ラジオ音楽教室の継続利用効果は、5年生では有意差があらわれなかったが、3年生においてラジオの効果認められた。

同じく、ラジオ音楽教室の効果については、東京都内6小学校で、3年生・5年生を対象に実施した1956年の研究〔11〕がある。これによると、聴取効果のはっきり認められたのは3年生で2校、5年生で4校あり、効果の認められなかったのは、両学年とも2校ずつであった。

学校放送テレビ音楽番組は、以前、小学校低・中・高学年別に3番組放送されていたが、今日では、前述のように小学校1～3年生の学年別に放送されている、高学年向のものは無い

2) テレビでは、1年生「ワンツー・どん」2年生「うたってゴー」3年生「ふえはうたう」が放送されている。このほか、「ラジオ音楽教室」が各学年別に放送されているが、その利用率は非常に低く、8%以下であるため、今回の考察からは除いた。事実、今回の調査でも、「ラジオ音楽教室」を利用している学校は、13校中1校のみであった。

[14]。

その効果についての研究は、実践記録としてはいろいろあるけれども³⁾、大規模な調査研究によるものは、これまで、あまり見当たらない。

放送番組の長期的累積効果を研究する場合大切なことは、テレビ利用開始前と1年後の成績を比較しても、そこにあらわれた統計上の変化は、純然たるテレビの影響だけによるものではないという点である。すなわち、事前・事後調査の間に非テレビ利用群に差が無く、かりにテレビ利用群に有意差があらわれたとしても、その差を生ぜしめた原因としては、テレビの効果それ自体が独立してはたらいっているのではない。その他の教育的諸要因が、長期間のうちに、全体として相互に関連し合っはたらいっているのである。

しかし、教育の実践活動は、本来、教師・教材・教具その他の諸々の教育的要素が、相互的に関連し合い総合的にはたらきあって、教授・学習過程の質的深まりを求めていくものである。従って、その効果も、総合的に把握されなければならないという面をもつ。つまり、短期的効果の測定の場合と異なり、テレビが、長期にわたる総合的な教育作用の中で中核的な役割をはたしているところに、独特の効果を求める考え方が大切である。

本稿では、こうした考え方に立って、テレビ音楽番組の継続利用による累積効果を考察してみた。

3. 子どもの音楽的能力について

1) 「音楽的能力」の概念

「音楽的能力」と言っても、その中には、リズム感・音の記憶や識別・メロディの記憶や表現・拍子感・速度感など、いろいろな側面をもつ。また、内容としては、「受容としての音楽的感受性」「活動としての音楽的表現」「知的理解」の3つが、総合されたものであるという論[20]もある。そして、その能力は、生得的なもの後天的なものを含んでいるとも言われている[5]。つまり、音楽教育学や音楽心理学の研究者の間でも、これについての明確で統一的概念規定がなされていないのである。また、その測定方法としては、Seashoreなど、多くの人々の考案したものがある[5]。

吉田[21]は、この概念を整理するために、これに関連する用語として、「音楽性 Musicality」「音楽的天性 Musical capacity」「音楽的才能 Musical talent」「音楽的適性 Musical aptitude」を挙げている。そして、「音楽的能力 Musical ability」を、「作曲、演奏、鑑賞の各面にかかわる遺伝的な後天的な諸能力」と説明した。また、この能力の発達は、指導の工夫によって、従来考えられていたものより、大巾に早められる可能性をもつとしている。

本稿では、この吉田の考え方を前提として、「音楽的能力」について、とくに「音楽を感じとり理解する力」という面に重点をおき、具体的には、昭和33年度に文部省が実施した全国学力調査(音楽)問題によってこれを測定し、比較・分析した。

2) 今日の音楽教育と音楽的能力について

子どもたちの日常生活の中で歌われる曲には、学校の音楽教育で教えられないものが多い。このため、学校の音楽教育が、子どもの現実生活からかけはなれたものになっているという点

3) 全国放送教育研究会連盟編「放送教育の探究」や、月刊誌「放送教育」にしばしば紹介されている。たとえば、綿貫光繁「音楽番組『ふえはうたう』を利用して」(1976年5月号)

が、以前から指摘されていた。そして、この傾向は、テレビ時代になってますます強くなってきた⁴⁾。

河口〔13〕も指摘しているように、子どもたちは、家庭や地域での日常生活の中で触れる雑多な音楽によって、むしろ強い影響を受けている。とくに、前述のように、テレビ・ラジオから次々と放送される歌謡曲、ポピュラーあるいはコマーシャルソングによって、小さい時から大きな影響を受けているのである。

従って、今の子どもたちの音楽的能力の形成には、学校の音楽教育のみではなく、こうしたマス・コミの影響、さらには、ピアノやヴァイオリンのおけいこなど、家庭や地域での生活全体が、強く影響を及ぼしている。

本稿では、こうした観点から音楽的能力を把えて、比較・分析を行なった。

II 研究のねらい

以上に述べた問題点から、本研究では、次の2点について明らかにすることをねらいとした。

1. 今日の子どもの音楽的能力について、テレビの普及がそれほどすすんでいなかった昭和33年度(全国普及率11.0%⁵⁾)の調査結果と比較して、進歩しているか否か、その実態を明らかにする。
2. 進歩しているとすれば、その進歩は、学校放送テレビ音楽番組の利用経験の有無によって影響されるか否かを明らかにし、放送教育の効果について考察する。

III 作業仮説

この研究をすすめていく上で、上記のねらいから、次のような作業仮説を設定した。

1. テレビ時代といわれる今日の子どもの音楽的能力は、テレビ放送開始後間もない昭和33年当時のそれと比較して、大巾に進歩している。
2. その進歩は、とくに、放送教育実践校(とくにテレビ音楽番組利用校)に大きくあらわれる。

IV 研究手続

1. 調査対象

岩手県・宮城県下の13小学校、6年生、合計1,729名

内訳は、第2表の通りである。

岩手県・宮城県とも、A～D校は、都市の市街地にある学校(以下、都市校)であり、E～G校は、農村部にある学校(以下、農村校)である。

4) 「放送文化」1976年5月号は、「歌をどうして子どもを理解する」と特集を組みこの問題を論じている。
5) 調査対象校のある宮城県でテレビ放送が開始されたのは、昭和31年であり、昭和33年度の普及率は5.4%であった。岩手県の場合、テレビ放送が開始されたのは、昭和34年からである。

第2表 調査対象学校・児童数

No.	学校記号	テレビ音楽番組利用経験		計	所在地
		有	無		
1	岩一A校	153	68	221	盛岡市
2	岩一B校	66	79	145	水沢市
3	岩一C校	73	110	183	盛岡市
4	岩一D校	28	78	106	盛岡市
5	宮一A校	162	34	196	仙台市
6	宮一B校	192	52	244	仙台市
7	宮一C校	152	36	188	仙台市
8	宮一D校	113	50	163	仙台市
9	岩一E校	54	0	54	岩手郡西根町
10	岩一F校	0	25	25	岩手郡雫石町
11	岩一G校	0	23	23	岩手郡岩手町
12	宮一E校	0	38	38	名取市
13	宮一F校	115	28	143	名取市
		1,108	621	1,729	

2. 調査用具・分析資料

1) 学校放送番組利用経験調査票

2) 音楽能力調査問題(昭和33年度文部省実施全国学力調査と同一問題, 資料参照) 所要時間: 26分
(録音テープ聴取16分を含む)⁶⁾

3) 学校放送教師用テキスト

3. 調査時期: 昭和51年5月~6月

V 結果とその考察

1. 昭和33年度全国学力調査結果との比較

文部省が昭和33年度に実施した全国学力調査結果〔19〕と今回の調査結果を比較したものが、第3表である。

第3表 昭和33年度全国調査結果と今回調査結果との比較

		n	\bar{x}	s	t
都市校における比較	昭.33.	8,055	61.0	18.9	16.8363
	昭.51.	1,446	70.1	17.5	***
農村校における比較	昭.33.	34,267	51.3	18.9	8.0662
	昭.51.	283	60.4	17.5	***
全体における比較	昭.33.	80,055	54.6	18.9	30.2559
	昭.51.	1,729	68.5	17.9	***

注)・都市校の場合, 昭和33年度の住宅地域と, 農村校の場合, 昭和33年度の農業地域の資料と比較した。

・***は, 0.1%レベルの有意差。

6) 今日の子どもの音楽的能力を調査するためには, 今の子どもの日常生活で親しまれている曲をとり入れた問題で調査する必要があるけれども, テレビの無い時代のそれと客観的に比較するために, 昭和33年度の調査問題をそのまま使用した。

これによると、今回の都市校と昭和33年度住宅地域⁷⁾との比較、農村校と農業地域との比較、さらにこの両者を合計したものの比較、いずれの場合も、0.1%レベルの有意差をもって、今回の調査結果がすぐれていた。

このことから、テレビがほとんど普及していなかった頃の子どもの音楽的能力と比較して、今日の子どもらの能力は、飛躍的に進歩していると言える。

つまり、仮説1について、完全に検証し得たのである。

2. 学校放送テレビ音楽番組利用経験の有無による比較

第4表 テレビ音楽番組利用経験の有無による学校別比較

学校記号	TV経験	n	\bar{x}	s	t
1. 岩 - A	有	153	65.0	14.8	2.4516 *
	無	68	59.2	19.6	
	計	221	63.2	16.7	
2. 岩 - B	有	66	69.6	15.1	0.1654
	無	79	70.0	13.8	
	計	145	69.8	14.4	
3. 岩 - C	有	73	69.8	16.6	1.9359
	無	110	64.5	18.9	
	計	183	66.6	18.2	
4. 岩 - D	有	28	66.1	16.8	2.1839 *
	無	78	57.9	16.9	
	計	106	60.1	17.3	
5. 宮 - A	有	162	72.7	19.4	0.6991
	無	34	75.2	15.9	
	計	196	73.2	18.9	
6. 宮 - B	有	192	75.4	15.1	1.7720
	無	52	71.2	15.1	
	計	244	74.5	15.2	
7. 宮 - C	有	152	75.7	16.5	1.7878
	無	36	70.1	18.0	
	計	188	74.6	17.0	
8. 宮 - D	有	113	75.4	15.9	0.7983
	無	50	73.1	17.5	
	計	163	74.7	16.4	
9. 岩 - E	有	54	69.1	12.8	
10. 岩 - F	無	25	61.8	14.7	
11. 岩 - G	無	23	45.8	17.4	
12. 宮 - E	無	38	67.9	17.1	
13. 宮 - F	有	115	56.9	16.8	0.5215
	無	28	58.8	17.8	
	計	143	57.2	17.0	

次に、学校放送テレビ音楽番組を利用した授業の経験のある子どもと、経験の無い子どもの成績を、学校別に比較したのが第4表である。当初、学校放送音楽番組を継続的に利用している学校と非利用校を、学校単位で比較しようとした。けれども、理科や社会科の番組と異なり、音楽番組の場合は、学校全体として利用しているところは少なく、むしろ同一学校でも、教師によって利用したりしなかったりするケースが多い。つまり、学級単位毎に利用—非利用が分れる。

さらにまた、前述のようにテレビ音楽番組は、1～3年生対象として学年別に放送されてお

7) 昭和33年度の資料〔19〕では、都市部を、住宅地域・商業地域・商工業地域など7地域に分類して集計しているが、その中でも、住宅地域の成績が最も高かったため、これと比較した。

り、4年生以上のものは放送されていない。

従って、今回の調査では、学校単位に利用—非利用を分類しないで、子どもひとりひとりの利用—非利用の経験を調べて分類した。つまり、利用経験有というのは、低学年の頃、テレビ音楽番組を利用した音楽教育を受けた子どもたちのことを指している。

なお、岩—E校では、テレビを利用した音楽教育が盛んで、全児童が利用経験を持っている。これに対して、岩—F、岩—G、宮—Eの各校では、テレビを利用した音楽教育は全く行なわれていなかった。

第4表の結果を考察してみると、同一学校に利用・非利用の両群のある9校のうち、岩—B、宮—A、宮—Fの3校のみが、平均値で非利用群が高い。けれども、有意差は、いずれの学校でも認められなかった⁸⁾。

他の6校については利用群の方が高く、そのうち2校(岩—A、岩—D)では、5%レベルの有意差で高い平均値を示した。

次に、この利用経験の有無による比較を、都市・農村並びにその合計で比較したものが、第5表である。

第5表 テレビ音楽番組利用経験の有無による比較

		n	\bar{x}	s	t
都市校における比較	有	939	72.2	16.8	6.1030 ***
	無	507	66.3	18.2	
農村校における比較	有	169	60.8	16.6	0.4286
	無	114	59.9	18.6	
都市校・農村校 全体における比較	有	1,108	70.4	17.3	6.0032 ***
	無	621	65.1	18.4	

これによると、都市校で利用群72.2—非利用群66.3と0.1%レベルの有意差を示し、全体においても、70.4—65.1と0.1%レベルの有意差を示した。けれども、農村校の場合は、有意差を認めるまでには至らなかった。

ここで注目しなければならないことは、農村の小規模校岩—E校では、テレビのみではなく、ラジオ音楽教室も以前から取り入れた実践を続けてきたという点である。この学校の成績と、放送を全く利用したことのない同じ農村部の岩—F、岩—G両校の成績を比べてみたとき大きなひらきのあることがわかる。

もちろん、岩—E校のこの高い成績は、単にテレビの影響ばかりではなく、合唱指導やその他、学校あげての実践活動全体の成果であると思われる。けれども、他の非利用校と比較した場合、放送教育の長期的累積効果の項で述べたような意味からも、この実践全体の動機づけや核として、放送教育の効果が、数字の上ではっきりあらわれたものと言わざるを得ない。

8) 学校別比較で、非利用群の方が高い平均値を示した学校については、放送利用という要因の外に、子どもの素質的側面や家庭環境の影響(たとえば、ピアノやヴァオリンのおけいこ事を行っているか否か)、さらには、クラブ活動など、多くの点から考察する必要がある。今回の調査では、これらの点に関する資料を求めるまでに至らなかった。

以上の考察から、音楽的能力の進歩に、学校放送テレビ音楽番組利用の効果があらわれたと言える。つまり、仮説2が検証されたことになり、音楽的能力の形成における放送教育の効果が、統計的に示されたことになる。

3. 問題別正答率の比較から

実施した音楽能力調査の、問題別正答率を、昭和33年度のものと同回のそれを比較したものが、第6表である。

第6表 問題別正答率の比較

問 題 (内 容)		昭.33.(A)	昭.51.(B)	B - A	有 意 差
〔1〕長調と短調とを聞き分ける能力	ア	56.9	81.9	25.0	* *
	イ	58.5	83.1	24.6	* *
〔2〕拍子を聞き分ける能力	ア	65.2	83.1	17.9	* *
	イ	76.8	86.3	9.5	*
	ウ	67.8	86.9	19.1	* *
	エ	60.2	79.0	18.8	* *
〔3〕速度を聞き分ける能力	ア	72.7	47.8	-24.9	* *
	イ	69.3	45.5	-23.8	* *
	ウ	72.3	92.4	20.1	* *
〔4〕音と楽譜との照合	ア	37.9	65.5	27.6	* *
	イ	55.1	70.3	15.2	* *
〔5〕音符の記入	ソ	69.2	83.2	14.0	* *
	レ	70.1	80.1	10.0	*
	ラ	68.2	83.7	15.5	* *
	ミ	68.3	82.5	14.2	* *
	ド	61.4	78.0	16.6	* *
	ミ	52.5	74.7	21.2	* *
	♯ファ	6.5	26.4	19.9	* *
	b シ	7.2	27.9	20.7	* *
〔6〕階名の判別	ハ長調	60.0	67.3	7.3	
	ヘ長調	53.3	64.6	11.3	* *
	ト長調	48.9	52.8	3.9	
	ニ長調	43.0	41.2	-1.8	
	イ短調	7.6	22.7	15.1	* *
〔7〕諸記号の理解	ア	53.0	60.1	6.9	
	イ	50.4	60.6	10.2	*
	ウ	51.8	57.8	6.0	
	エ	55.1	73.7	18.6	* *
	オ	70.8	85.0	14.2	* *
	カ	58.7	76.8	18.1	* *
〔8〕楽譜のつなぎ合せ	〔春の小川〕	49.6	69.9	20.3	* *
	〔みなと〕	50.6	49.5	-1.1	
	〔きしや〕	28.1	49.5	21.4	* *
	〔村のかじや〕	17.1	40.8	23.7	* *

注：正規分布検定による。 * = 5%レベル, ** = 0.5%レベル。

なお、録音テープを利用した問題は、[1]～[4]である。

この表から考察された点を列挙してみると、次の通りである。

1) 全体の平均点に大きな差のあることから予想されることであるが、全般的にみて、昭和51年の正答率の方が高い(34問中30問)。

2) 録音テープを聞いて解答する問題[1]～[4]の11問中2問を除いて、いずれも、昭和51年の正答率が昭和33年のそれよりも、有意差をもって高い。とくに、[1]長調・短調の聞き分け、[2]拍子の聞き分け、[4]メロディと楽譜の聞き分け照合は、全問とも、昭和51年の方が高い。

この点、I問題の項でも言及したように、今の子どもたちが幼児の頃から触れているテレビを中心としたマス・コミが、これら音楽的能力の感覚的側面に影響を及ぼしたものと考えられる。

しかし、メトロノームで速度を聞きとらせ、そのあとに曲を聞かせて速度を比較させる問題[3]では、3問中2問で昭和51年の正答率の方が劣っていた。

3) [6]階名の判別、[7]諸記号の理解、[8]楽譜のつなぎ合せなど、音楽的能力のうちでも、知的理解を調べる問題の中には、有意差の認められない問題も多くあった。

とくに[6]の「ニ長調」の問題については、昭和51年の方が低くあらわれたけれども、これは、昭和33年当時、教科書でも取扱っていたニ長調が、昭和43年の学習指導要領改訂においては、6年生で教えられなくなったことも影響していると思われる。

以上の点から総合して言えることは、テレビを中心とした今日のマス・コミは、音楽的能力のうちでも、拍子感など感覚的側面の進歩に影響力を示しているということである。反面、音楽的知識の理解に対しては、前者に対するほど大きな影響力をもたないのかも知れない。しかし、この点についての詳しい考察を行なうためには、さらに音楽的能力を要素的に分析し、別な調査問題を作成して調査分析しなければならない。

4. 教師用テキストの分析から

以上、調査結果をもとにした考察から、今日の子どもの音楽的能力が、テレビのほとんど無かった時代のそれと比較して、はるかに伸びていることを明らかにした。

次に、学校放送番組で使用されている曲を調べ、昭和30年のものと50年のものを比較し、その難易度を比べることによって、音楽的能力の伸びについての資料的裏づけを試みた。ただし、昭和30年代前半の資料として入手できるのは、ラジオ番組関係のみであったので、教師用テキストの中から、ラジオ関係の資料をとった。

また、昭和30年頃は「音楽教室6年生」のほか、高学年向に「音楽の旅」が放送されていた。前者は、「春の小川」など、主として文部省唱歌的な曲をとりあげ歌唱指導を中心に構成され、後者は、割に新しい曲を多様にとりあげ、鑑賞を中心に指導していた。ここでは、昭和30年1学期の「音楽の旅」でとりあげられた曲と、昭和50年1学期「音楽教室6年生」で使用された曲の例を示した(第3図)。

第3図をみると、昭和30年のものは、文部省唱歌の流れをくむ単純なリズムによって構成された曲である。けれども、昭和50年のそれは、シンコペーションを用い、より複雑なリズム(例えば♪♪♪)をとり入れている。

このように、リズムに例をとってみても、学校放送で用いられる曲のレベルが、かなり高くなっていることがわかる。そして、このことは、今日の学校放送ラジオ音楽教室で送り手がねらいとする目標を示した第4図をみても、そのレベルの高くなっていることが理解される[12]。

第3図 ラジオ音楽番組で用いられた教材の比較

昭和30年 ラジオ音楽番組「音楽の旅」(小学校高学年)より

ずいずいずっころばし
 ずいずい ちころばし ごまみそ ぞ。 etc.

遠き山川
 なつ かしき よる-さとのそら etc.

写生
 たのしいスケッチはれたあ-おぞらが
 ばんにパレットごがつのそら - etc.

さくらさくら
 さくら さくら やよいのそら-は etc.

同中間部
 ふすみか くも-か あまひに にお-ら etc.

昭和50年「ラジオ音楽教室6年生」より

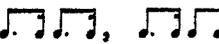
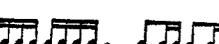
あしたのぼく

歌

1. ゆうひの な かへー かけてく ぼく だー でっかく まっかなー
 2. ゆうひの な かへー とんでく ぼく だー まっすく ゆうきのー
 3. ひかりの な かへー はばたく ぼく だー かがやく きぼうのー

わのな か へ ないてー きょう はー おわたたきょう だ
 てをあげ て ころんだー きょう はー おわたたきょう だ
 めをあげ て くじけたー きょう はー おわたたきょう だ

第4図

基礎 学年別	「ラジオ音楽教室」を継続聴取すると……。	リズム	旋律	和声
第1学年	右にあげたリズム・旋律・和声のほかに ・拍子 ・アクセント ・速さ ・強弱 ・音質	 これらを組み合わせたリズム	連続する五つぐらいの音をラララ……で歌う。 階名唱で歌う。 日本旋法の旋律に親しむ。	長調の主要三和音を聞き分ける。 長調のI, Vを分散唱する。
第2学年	なども、音楽の要素として考えられます。これらの感覚的なものと、聴取能力・読譜能力など知的なものを総合した能力を、児童の音楽性と考えますと、音楽の基礎としての	 前学年のものにこれらを組み合わせたリズム	連続する七つぐらいの音をラララ……で歌う。 ハ長調を階名唱する。 日本旋法の旋律の聞き分け。	長調のIVを加え、I, IV, Vを聞き分け、分散唱させる。
第3学年	リズム・旋律・和声は、そのほかここにあげなかった要素も当然含めますが、それらを統合的に楽しく学ぶことによって児童の音楽性は、創造的な表現や鑑賞力となって児童たちに定着し高まっていくでしょう。	 前学年までのものにこれらを組み合わせたリズム	前学年までのものに2度、3度音程の聴唱を加える。	前学年までの能力をさらに高める。
第4学年		 前学年までのものにこれらを組み合わせたリズム	前学年までのものにイ短調、4度音程の聴唱を加える。	長・短調（平行調）の主要三和音を分散和音唱、単音抽出唱させる。
第5学年		 前学年までのものにこれらを組み合わせたリズム	前学年までのものに5度音程の聴唱、ハ長調、ニ短調を加える。 日本旋法の陰、陽の聞き分け。	前学年までの能力をさらに高める。
第6学年		前学年までのものを組み合わせたリズム	前学年までのものにト長調、ホ短調、6度音程の聴唱を加える。	同上 前学年までの能力がさらに定着するように徹底する。

言うまでもなく、このことは、学習指導要領の改訂と関係する。

ちなみに、今日の小学校3年生で取扱うことになっているシンコペーションは、昭和33年の学習指導要領では5年生の内容であった（昭和26年の「試案」でも同じ）。これが、鑑賞・歌唱・器楽・創作に、新たに「基礎」を加えた昭和43年の改訂から大巾にレベルアップし、今日に至っている。

ところが、教室の場でシンコペーションを取りあげ、理解させたり表現させたりする指導を行なうのは3年生になってからであるけれども、昭和51年の幼稚園・保育所向テレビ番組「なかよしリズム」のテーマソングには、このリズムがひんばんに使われている。しかも4～5歳の幼児が、テレビに合わせて正しく歌い、からだを動かしているのである。

つまり、音楽的能力は、このようにして、教科書をとおして子どもに与えられる前に、テレビが提供する音楽によって、小さいときから、感覚的、身体運動的に体得されているのである。

Ⅵ ま と め

昭和33年度に実施された全国学力調査（音楽）の問題を、今日の子どもに与えて調べたところ、次のことが明らかになった。

1. 今日の子どもの音楽的能力は、テレビの普及がごく少なかった初期の頃に比べて、飛躍的に進歩している。
2. さらに、学校放送テレビ音楽番組を利用した子どもたちに、より高い音楽的能力がみられたことから、この能力形成に及ぼす放送教育の効果が明らかにされた。

[後記] この研究は、放送文化基金より研究費を助成された「教育と放送を考える会（代表：斎藤伊都夫）」の研究「学校教育における放送利用の総合的研究」の一部として実施したものである。

参 考 文 献

- 1 Allen, w. H. : Audio-Visual Communication, (in Encyclopedia of Educational Research, 3rd edition, Macmillan) 1960.
- 2 Himmelweit, H. T., Oppenheim, A. N. & Vince, P. : Television and the Child, Oxford Univ. Press, 1958.
- 3 秋山隆志郎：学校放送利用の現状，NHK総合放送文化研究所，1976。他
- 4 石川桂司：テレビ理科番組の利用形態に関する研究—並行型と融合型の比較—，視聴覚教育研究，第4号，1972。
- 5 梅本堯夫：音楽心理学，誠信書房，1966。
- 6 NHK編：昭和49年度放送受信契約数統計要覧，日本放送協会，1975。
- 7 NHK放送世論調査所：昭和50年度「国民生活時間調査」の結果について，1976。
- 8 NHK放送世論調査所：図説日本人の生活時間，日本放送出版協会，1974。
- 9 NHK総合放送文化研究所：幼児のテレビ視聴，文研月報，1970。10。299-332。
- 10 NHK総合放送文化研究所編：放送教育の研究と理論，日本放送出版協会，1966。
- 11 NHK放送文化研究所：ラジオ音楽教室の聴取効果，「学校放送の調査と実験」，1960。327-357
- 12 NHK学校放送教師用テキスト「小学校6年生」昭和50年1学期用
- 13 河口道朗：子どもの発達と音楽文化，音楽教育研究No.98，音楽之友社，1974。

- 14 全国放送教育研究会連盟編：放送教育の歩み，全放連，1974.
- 15 辻 功：マス・メディアの効果，児童心理学講座第9巻，金子書房，1969.
- 16 日本放送教育学会編：放送教育大事典，日本放送教育協会，1971.
- 17 布留武郎・平岡正之・石田岩夫：学校放送の聴取効果の測定—ラジオ音楽教室について—，NHK放送文化研究所「調査研究報告第1集」1956，63—86
- 18 南 博：テレビジョンと受け手の生活—受けとり反応と社会効果の問題点—，思想，1958. 11.103—115
- 19 文部省：全国学力調査報告書 昭和33年度版，大蔵省印刷局，1959.
- 20 幼児教育研究会編：幼児音楽教育法，東京書籍，1969.
- 21 吉田久五郎：音楽的能力に対する音楽教育学的考察，岩手大学教育学部研究年報30，1970.

音楽能力調査問題

学校	組	番	なまえ
----	---	---	-----

これは、みなさんの音楽についての力を調べる調査です。

はじめに、録音テープを聞いて答を書き入れる問題が四つあります。

つぎに、録音テープを聞かないで答を書き入れる問題が四つあります。

[1], [2], [3], [4], の四つの問題は、録音テープを聞きながら、答を書いてください。

[1] 長調と短調のききわけ

ア はじめにひいたふしは $\left\{ \begin{array}{l} \text{長調} \\ \text{短調} \end{array} \right\}$ です。

イ はじめにひいたふしは $\left\{ \begin{array}{l} \text{長調} \\ \text{短調} \end{array} \right\}$ です。

[2] 拍子あて

ア 拍子 イ 拍子 ウ 拍子 エ 拍子

[3] はやさあて

ア この曲は、はじめに打ったメトロノームとくらべて

$\left\{ \begin{array}{l} \text{はやい。} \\ \text{おそい。} \\ \text{おなじ。} \end{array} \right.$

イ この曲は、はじめに打ったメトロノームとくらべて

$\left\{ \begin{array}{l} \text{はやい。} \\ \text{おそい。} \\ \text{おなじ。} \end{array} \right.$

ウ この曲は、はじめに打ったメトロノームとくらべて

$\left\{ \begin{array}{l} \text{はやい。} \\ \text{おそい。} \\ \text{おなじ。} \end{array} \right.$

[4] 楽譜あて

あっている楽譜を一つ選んで、その番号を○でかこみなさい。

ア

イ

これで、録音テープを聞いて答える問題は、終わります。

これからあとは、録音テープを聞かないで答えを書いてください。時間は10分です。

[5] 下に書いてある階名(ドレミ)を五線に全音符(○)で書き入れなさい。

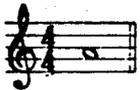
ド	ソ	レ	ラ	ミ	高いド	高いミ	シャープ	フラット
					(ド)	(ミ)	のつ	のつ
							いた	いた
							ファ	シ

[6] 左の  の音は右の調子では何の音になりますか。

の中にその階名^{かいめい}（ドレミ）を書き入れなさい。



ハ長調では です。



ヘ長調では です。



ト長調では です。



ニ長調では です。



イ短調では です。

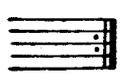
[7] 次のいろいろな記号は何を表わしていますか。下に書いてある八つのことばの中から正しいものを選んで、その番号を の中に書き入れなさい。

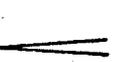
(ア) *mf* =

(イ) *p* =

(ウ) *f* =

(エ)  =

(オ)  =

(カ)  =

1 強く

2 やや強く

3 だんだん強く

4 のばすしるし

5 弱く

6 やや弱く

7 だんだん弱く

8 くりかえしのしるし

